
ペルソナ3 《とある少年と絆と奇跡》

とあるいぬまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナ3 《とある少年と絆と奇跡》

【Nコード】

N4437Z

【作者名】

とあるいぬまる

【あらすじ】

ペルソナ使いとして目覚めた少年の物語。

ペルソナ3の二次創作で、基本的に原作沿いです。

タイトル変更しました

始まりの日

父が死んでからもう十年になるのか

そんな事を考えながら、飾り気のない部屋の中で、高校生ぐらいの少年は馴れた手つきで黒光りする自動拳銃を手にする。

『ベレッタM92』と呼ばれるものだ。
米軍の制式採用拳銃。

明らかに日本の高校生が持つていていいモノではないのだが、少年にはどうしても必要なモノなので仕方がない。

「もうそろそろかな？」

ベレッタに意識を向けたままの少年は、その眩きと同時に部屋にチラリと時計に目を向ける。

時刻はPM11時59分

それを見て少年は微笑を浮かべた。

ベレッタに装填されているのを確認して、安全装置を外し、枕の近くにゆったりとした動きで置いておく。

まさかこの寮にまで『ヤツら』が来るとは思えないが、念には念をとというやつだ。

こうしてやっと、安心して眠れる。

「ああ……、授業なんざ受けたくねえ。寝て起きたら学校。眠らなくても、ゆっくり時間が進んで学校。愚痴ってもこの連鎖からは逃げられねえと理解はしてますけどね」

少年は「ハア」とため息を吐くと、ベッドに身を預けそのまま眠りへと落ちていった。

*

少年の父は優秀な軍人だった。

フランス外人部隊に入隊し、最年少で日本人曹長となり、数年後にはフリーの傭兵としてあらゆる仕事を請け負うように。

殺し屋に近いものだ。

金を積まれれば何でも請け負ったらしい。

暗殺、破壊工作、護衛。

そういった仕事をしていくうちに、父はいわゆる『汚い業界』でそれなりの名を有するようになってきたころだった。

父にひとつの仕事が舞い降りてきた。

桐条グループの重要実験施設の警備。

実験内容を詮索しないことだけが条件の簡単な仕事なはずだった。

その簡単な仕事が、父の命を奪った。

父は施設の警備中に死んだ。

父が死んで数日後、少年の元に父の死因が届いた。

実験所を狙う者達に殺されたわけではない。

不幸な爆発事故に巻き込まれた。

兵士としてはあまりにも誇りのない死に様だった。

少年はそれを聞き、最初は父との思い出を頭の中に思い浮かべた。父はまだ幼い自分にありとあらゆる戦闘訓練を強要した。

戦闘訓練といっても、流石に銃を扱う訳ではない。

本当に初歩的なCQCと、体力練成。そして色々な知識。

思い出を一通り辿り、少年は次に疑問を浮かべた。

何故、父はこんな仕事を選んだのだろうか？

どれだけ考えても、幼い少年にその答えは出せなかった。

その答えが理解できなかったからなのかは分からないが、同じ道を歩もうと決めた。

闘う道を歩もうと決めた。

しかし、戦い方を、手本を見せてくれる人間はすでにこの世にいなかった。

ずっと、たった一人で優れた兵士になるために体を鍛え、知識を集めた。

父が残してくれたのは、仕事で稼いだ汚い金と、日常生活では使わないであろう知識と、どこで手に入れたかも分からない銃だけ。

その金も、少年が中学生のころにはすでに尽きかけていた。そんな頃だった。

少年が、『ペルソナ』使いとして目覚めたのは。

始まりの日（後書き）

はじめまして（――）<

まずは閲覧してくださった皆様、ありがとうございます。
尽力しますので、どうかよろしくお願いします!!

転校生（前書き）

原作キャラの登場回です。

誤字修正しました

転校生

朝の教室。

それぞれの生徒がそれぞれの思いを胸に馳せながらそれぞれの行動を取っている。

友達と談笑する者。ひたすらに睡眠時間を稼ぐ者。春休みの宿題を今頃になって取り掛かるという若干というか確実に手遅れです状態の者。

勿論オレ、『沢村学』もその例に漏れない。

睡眠時間をひたすら稼ぐ派として、机に頭を突っ伏していた。ブレザーが額に当たっている感覚がもうたまらない。

こうしていると茶髪のくせ毛というコンプレックスも忘れられる。そんな幸せ感覚MAXに浸っていた時だった。

「おい、起きろって」

平穩をぶち破る声が鼓膜を揺らした。

この声を俺は知っている。一年生の時に同じクラスになって以来、中々に仲のいい友達……、だった気がする。

反射的にのそつとした動作で顔だけを声の発生源に向けるとやはり見知った顔が、野球帽にちょび髭が特徴的な少年、『伊織順平』が視界に入った。

「んだよ、俺疲れてんだよ手短に頼む、じゃあそう言う事でおやすみなさい。また明日な」

「言葉のキャッチボールどころかこっちに投げてすらこねえ！！俺何かした！？」

「あゝ、分かった分かった。それで何だよ？」

ふわぁ、とあくびをしながら聞いてみると、即座に順平が待ってましたと言わんばかりに目を輝かせる。

無視シカトした方が良かったかと今頃後悔するも、時すでに遅し。なるべく早く眠りにつきたい身としては、話を長引かせられても困る。

「今日さ、転校生が来るらしいぜ。知ってた？ どうだ俺の情報網！ 耳を傾けてみたくなっただろ？」

「いや、いいわ。それ昨日から知ってるし。転校生とは同じ寮だし」

「……何だこの敗北感？ なんつーか、異常に空しくなってきた」
オレの一言で完全にテンションが下がったのか、順平は肩を落として自分の席へと帰っていく。

その哀愁ただよう背中に若干の罪悪感を感じながら、俺はそのまま机につっぷした。

*

放課後。

始業式の校長の話も見事に睡眠時間にしたおかげで、眠気はすっかりなくなつた。

転入生の『有里湊』の自己紹介を除いては特に何の変哲もないHRを聞き流し、帰宅準備を終え、朝のお詫びにラーメンでも奢って

やるかなと順平の席に声をかける。

「よう。帰りにはがくれ寄ってこーぜ。俺の奢りでいいからさ」

「お、マジ？もち行くぜ。でも、その前にさ。転校生に声かけねえ？」

「相変わらずだな、お前」

苦笑いしながらも、うなづく。

朝は転校生の事をさも知っているように言ったものの、実は同じ寮に住むことや、自分と同じペルソナ使いということしか知らない興味がないと言えば嘘になる。

それに、転校生というのは何かと不安も多いだろう。自分たちが友好的にする事で、少しでもその不安をなくせるかもしれない。

順平が帰宅準備を終えると同時に、転校生『有里湊』の元へと駆け寄る。

「よう、転校生！！」

「おつかれさん、転校生もとい有里」

「……誰？」

少し驚いたような、警戒心を滲ませたような声で有里がこちらを見つめる。

当然の反応だろう。

転入したての自分に声をかける見知らぬ生徒が2人。どちらも若干不良っぽい見た目（本人たちに自覚なし）だ。

しかし、当の本人たちはそんなことは気にせず（というより自覚

がない)続ける。

「オレは伊織順平。ジュンペーでいいぜ。んでこっちは」

「沢村学。マナブでいいよ。転校したたって気まずいと思うけど、俺達には気軽に話しかけてくれていいから」

「んだよ、ジン。それオレが言うつもりだったのに!! ま、そういうわけだ。よろしくな転校生!!」

と、俺たちが転校生に友好的かつナイスガイな感じを醸し出している時だった。

『……ハア』

呆れたような溜息が聞こえた。

反射的にそちらを見るとピンクのカーディガンを着た少女が視界に入る。

『岳羽ゆかり』

彼女も自分や有里同様、ペルソナ使いだ。

去年もクラスが同じだったという事もあり、どちらかというところしい方だと思う。だから、だろうか。自分や、特に順平に対しては容赦がない。

「なんだよ岳羽さん。別にオレ達変なことしてねーぞ。な、順平?」

「そつだぞゆかりっち。オレ達はいま、いいやつ侍してるだけだつて」

「相変わらずよね。誰これ構わず馴れ馴れしくして。ちょっとは相手の迷惑とか考えた方がいいよ」

「いや、親切にしてるだけだって」

「ふうん。なら、いいんだけど」

そこまで言うと、彼女は有里の方へ視線を向け、

「でも、偶然だよね。まさか同じクラスになるなんてさ」

「そうだね」

「うん、驚いたよ」

幾分、彼女が柔らかい口調になったのを俺達は見逃さなかった。

オレは微笑を浮かべ、順平の方を見る。順平も同じ思考に至っていたのか、笑みに笑みを返してきた。

どうやら何をすべきかは分かっているようだ。

「あれ？ 何かオレ達と扱いが違うような気が……。なあ順平さんや」

「そうだねマナブさんや。そう言えば、お二人さん、今日仲良く一緒に登校したんだって？ ちょいと聞きたいことがあんだけど」

「えっ、ちょっとやめてよ！」

ニヤニヤとしたオレ達に焦りを感じたのか、若干大きめな声でゆかりは否定する。

「彼とはたまたま寮が一緒っただけ。沢村君は知ってるでしょ？
何でもそういう話に結びつけすぎだっただけ。ってか噂になるの早すぎ……。不安だな、そういうの」

ゆかりは若干顔を曇らせ、また有里の方を見る。

おそらく昨日の影時間になにかあったのだろう。それを思い出して口止めに釘をさしておきたいと言ったところだろうか。

そんな事を考えながらオレはゆかりの言葉に耳を澄ます。そして、

「昨日の夜のこと、ホント誰にも言わないでよ？」

「……………」

順平も聞こえていたのか、二人して固まった。

転校生（後書き）

閲覧してくださった皆様、ありがとうございます！
— — — — —
<

タルタロス(前書き)

初めての戦闘回です> | | () <

タルタロス

突然だが、一日は24時間ではない。

『影時間』。

普通の人間では感じることもすらできない隠された時間。適性のある人間のみがそれを感じ、『影時間』にのみ存在する『シャドウ』と呼ばれる謎の異形に立ち向かう事が出来る。

その適性のある人間は、『ペルソナ使い』と呼ばれ、誰にも知られることなく暗躍していた。

*

影時間

俺は『タルタロス』と呼ばれるシャドウの巣窟の中で、銃口を前方に向けいつでも撃てるよう、ブルパップ式の突撃銃『IMIタボールAR21』を構えていた。

日々その内部構造を変化させ続ける謎の塔。詳しいことは分からないが、関係ない。

分からない事はこれから調べればいい。徐々に仲間のペルソナ使いも増えてきて、そろそろ本格的にこの塔を探索する時もあるだろう。

さて、ここで問題だ。

今日はまだその時ではないのに、何故俺がここにいるのか？

その理由を一言で言うならば、『何故親父は銃を手にし、戦う世

界を選んだのか?』

その答えを知ってしまったから。

AR21の銃口を前方に向けながら、警戒しながらゆっくりと慎重に歩みを進める。

額から汗が一滴垂れてきた。多少、緊張しているらしい。

しばらく歩いていると、前方に曲がり角が見えた。

「……」

息を殺しながら、前方の曲がり角に達すると、俺はあることを確信しながら壁に背を預ける。

経験からくる感覚というやつだろうか。

見なくても分かる。この曲がり角の先にヤツらが、シャドウがいる。ゆっくりと影から顔だけを覗かせると、視界に三体のシャドウが入った。幸い三体とも自分に背を向けている状態だ。

つまり、先手はこちらのもの。動かない手はない。

出来るだけ音を立てないように、角から体を出し、片目を伏せてAR21のドットサイトを覗く。赤い点をシャドウに重ね、息を吐きながら引き金に指をかけた。

「捉えたぜ」

瞬間、引き金を引く。それと同時に一体のシャドウがピクリと体を痙攣させ、そのまま黒い粒子と化す。

一丁上がりだ。

発砲音に気づき、残りの二体がこちらに向き直ろうとするだろうが、関係ない。

すぐに、ドットサイトの赤い点をもう一体に重ね、引き金を引く。放たれた弾丸は標的に吸い込まれるように空気を引き裂き、そして

標的をくりぬいた。

これで残りは後一体だけ。

その一体が完全に自分を視界に入れるとほぼ同時に、弾丸を3発ほどくれてやる。

空のケーシングが飛び出し、小さな金属音を奏でた時には、すでに視界にはシャドウの姿は無かった。

「まさに敵なし、だな」

自分の腕に酔っているわけではないが、客観的に見ても今の動きにはキレがある！……と思う。

とは言っても、いつまでも悦になっている場合ではない。

銃声に気づき、他のシャドウが集まってくる可能性がある。5体ぐらいまでなら何とかかなりそうだが、AR21の30発マガジンでは大勢のシャドウを相手にするには十分とは言えない。

他の仲間の支援があれば、ブルパップ方式であるAR21のリロードの隙も見せられるだろうが、今回は一人だけだ。一応サイドアームとしてベレッタを持ってきてはいるが、あまり期待し過ぎない方がいいだろう。

そう思い、踵を返そうとしたその時、

「……前方に五体か」

視界の先には5体のシャドウが現れる。

殺さない理由はない。挟まれたら少々マズイが、5体とも自分の前方にいるのだ。撃つてくれといわんばかりに。

「折角来てもらったのに悪いな。別の所に逝ってもらうぜ」

皮肉に答えるようにシャドウが吠え、こちらに距離を詰めてきた。

それをドットサイト越しに見つめながら、特に力まずに人差し指を引き金にかける。

残弾のこりは少々気になるが目の前の相手には十分足りるだろう。そんなことを考えながら、俺は再び引き金を引きはじめる。

五体のシャドウが消えるのに、そう時間はかからなかった。

タルタロス（後書き）

閲覧してくださった皆さん、ありがとうございます！
「」
「」
＜
無双になるのかどうかの微妙な戦闘回でした。

満月の夜と恐怖（前書き）

主人公のペルソナ初登場です。

満月の夜と恐怖

有里が転校してきてから二日後の影時間。

俺は定期的に、ある先輩が出ているように影時間に夜道を出歩いている。パトロールとか見回りとか言い方は色々あるが、どれがピツタリくるかはいまいち分からない。

影時間に迷い込んだ人間の救出や、稀に街に現れるイレギュラーなシャドウへの対処とか目的は複数ある。

とは言ったものの、そんな事態は滅多に訪れないためほとんどが徒労に終わる。

よって、タルタロスの内部とは違い緊張感など毛ほどもない。一応AR21とベレッタはいつも通り装備しているが使う機会はないだろう。

ちよつと退屈だなあとと思いながら、俺は空を見上げた。

「今気づいた。今夜つて満月だったんだな……。限りなく、どうでもいいけどね」

ふわぁ、と気の抜けたあくびをしながら、首を回す。骨がこすれてゴキゴキと音が鳴る。

その時だった。

「んぁ?」

ちよつとした違和感を背後から感じ、俺は振り返る。

本当にちよつとした違和感だった。自分の部屋に置いてある物の配置が若干変わってない?ぐらいの。

振り返った直後、

「ッ!？」

炎の塊が俺の顔面を焼き尽くすべく迫ってきた。

突然の攻撃に、ほとんど考えることなく右に飛ぶ。僅かに左肩を焼かれたが気にしている場合ではない。着地と同時にAR21のドットサイトを覗きこんで、構える。

襲撃者の正体は分かっている。イレギュラーのシャドウだ。これだけならば、俺は別に驚愕することはなかった。

イレギュラーの存在は稀にある事だと知っていたからだ。

今までにも多くはないがイレギュラーとの交戦もある。

しかし、

「冗談だろ……」

俺はドットサイトから目を離し、目の前の状況から来る驚愕に任せて顔をひきつらせた。

視線の先で、これまでにないほどの数のシャドウが蠢いている。

あり得ないことだ。今までこんなことは一度もなかった。

下手をするとタルタロス内部に相当する量かそれ以上。

俺の反応に気をよくしたかのように、先頭のシャドウが吠えた。

その声で俺は再び現実に戻る。信じられないことだが、起きてしまったことは仕方がない。戦場で生き残るには、何にも動じない精神と冷静な思考力が不可欠だ。

「……チッ」

この量では、サイトを覗き込む照準動作は視野が狭まり危険だろう。趣味ではないが、レーザーポイントの光学照準装置のスイッチをオンにする。

直後、赤い点が先ほど吠えたシャドウに映し出されたのを確認すると、俺は引き金に指をかけた。

「そう簡単に飯にありつけると思っなよ、シャドウどもッ!」

引き金を引くと同時に、シャドウ達も動きだす。

全く予期されなかった、イレギュラーな戦闘が始まった。

*

沢村の交戦開始からしばらく後。

特別課外活動部の学生寮作戦室で、緊急を意味する警報が『桐条美鶴』と『岳羽ゆかり』、『幾月修司』の鼓膜を揺さぶった。

何事かと思った瞬間、無線から連絡が入る。

相手は自分達と同じ特別課外活動部の一員『真田明彦』だ。緊急、という事もあり嫌な予感をよぎる。

「…明彦か? どうした?」

『凄い奴を見つけたっ! これまで、見たこともないヤツだ!』

消耗しているのか。言葉と言葉の間には息切れが入り混じり、明らかに不味い状況だというのが分かった。

『ただ、あいにく追われてて…。もうすぐそっちに着くから、一応知らせておく』

「それ、ヤツらが、ここに来るって事ですか!?!」

「理事長！ 今日の監視はひとまずここまで。我々は応戦の準備をします！！」

「あ、ああ」

幾月の承認を得ると同時に、桐条は無線機を真田とは別の相手につなげる。

おそらくは現在の特別課外活動部において最も力を持つペルソナ使い。

『沢村学』。

ペルソナ使いに覚醒したのは中学生のところだが、それ以前から何らかの戦闘訓練を積んでいたらしく、その戦闘能力は相当なものだ。念のためにこちらに呼び戻しておきたいが、真田があのような様子では沢村もすぐには向かえない可能性もある。希望2割不安8割の中、無線は思っていたよりも早くつながった。

「沢村！ 聞こえるなら今すぐ応答しろッ！！」

『な　、　んですッ！？』

声に混じり、聞こえてくる銃声に桐条は苦虫を噛み潰したように顔を歪める。

予想の範中ではあったが、沢村も戦闘中だという事実は少し痛い。つまり、ここに向かってくるシャドウの相手は負傷した真田と自分だけでこなさなければいけないという事だ。有里や岳羽は適性こそあるものの、実戦経験はまだない。真田を負傷させるほどの相手に戦えというのはいささか無茶が過ぎるだろう。

「交戦中に申し訳ないが、急いで寮まで戻って来い！ 大型のシヤドウがこちらに向かってしていると明彦から連絡が入った！！」

『……大型、ですか？ 了解です。こっちもそれなりの状況なんですけど、愛する皆のために早めに着くよう心がけますよ』

ブツッ！という歯切れの良い音が作戦室に響いた。沢村が一方的に無線を切ったらしい。

やはり、沢村がこちらに来るのは少し後になりそうだ。それまでは厳しいかもしれないが、何とか自分が食い止めるしかない。

桐条は軽く舌打ちして、岳羽に視線を向ける。

「……正面玄関には私が行く。岳羽、君は2階に居る彼を起こして、裏から逃がすんだ！」

「わ、分かりましたっ！」

自分が戦わねばならない。

覚悟を決めて、桐条は正面玄関へと急いだ。

*

「クソッ！」

毒づいたところで今の状況が変わるわけではないが、愚痴らずにはいられない。

先ほど現れたシヤドウの数はだいぶ減らしたが、それでも少ないとは言えない。寮との距離はそう遠くはないが今の状況で向かっても、「……後ろにいるの、何？」となるのが落ちだ。

それにしても『大型のシャドウ』というのは一体なんなのだろうか？今までいろいろんなシャドウと闘ってきたのだが見当もつかない。

そんな事考えてる場合じゃないか。とにかくこいつらを早く片づけないと。

……使っしかない。

AR21の引き金を引き自分に最も近いシャドウを撃ち抜くと、俺はひとまずAR21から手を離す。肩ひもにかけられブラリとだらしく垂れるが気にせず、左足のホルスターからベレッタではない銀色の銃を抜いて自分のこめかみに向け、

「ニーズヘツグツ！！」

自身の頭を撃ち抜く。

直後、俺の背後に『ソレ』は現れた。

『ソレ』とは俺の心。もうひとりの俺だ。

「メギドラオンツ！！」

俺の言葉に應えるように、灰色の翼竜は天に向けて吠える。

その咆哮は全てを破壊する死の象徴。

刹那。

シャドウ達を爆発が飲み込む。

衝撃波は全てを薙ぎ払い、爆炎は全てを焼きつくす。

粉塵が去り、視界が完全に晴れるころには、すでにシャドウは跡形もなく消滅していた。

しかし、その結果に俺は苦虫をかみつぶしたような顔つきに。

「……使いたくなかったけど、しょうがないよな。これは」

そう、俺のペルソナ『ニーズヘッグ』は俺の思いに応じてシャドウを殲滅してくれた。

ずいぶんと派手な傷痕おきみやげを街中に残して。

この爆発の跡が世間でどう騒がれるのか。

それを見て桐条先輩はどんな風を感じるのか？

前に真田先輩が言っていた桐条先輩の『処刑』とはただの比喻表現なのか？

…俺はこの後も生きていけるのか？

……天国ってあるのかなあ？

寮に向かって走り出しながら、何か走馬燈のようなものが頭の中を駆け巡るのを俺は感じていた。

満月の夜と恐怖（後書き）

閲覧してくださった皆さん。ありがとうございます！――！――！
主人公のペルソナはオリジナルですので、外見は皆様の想像にお任せします。

それでは、次回もよろしく願いします！！

死神の片鱗（前書き）

やっと最初の満月が終了です。

死神の片鱗

「ッ!？」

自身の部屋にまで響きわたる物音に、有里湊は目を覚ました。

「……なんの音？」

明らかに普通ではない。何となくだが自分に危機が迫っている気がする。

外の様子を見に行くべきだろうか？

若干の不安を感じながらも、有里は起きあがった。

その時、

「起きて!」

叩きつけるようなノックの音と共に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

確か、岳羽さんだっただろうか？

妙に切羽詰まっている所を見ると、やはり何かが起こったのだ。危険なことが。

「ゴメン、勝手に入るよっ!」

ゴチャゴチャと考えているうちに、有無も言わず扉が開かれる。普通に鍵を開けて入ってきた所を見るとマスターキーでも使ったのだらう。

ミスターマイペースこと有里は案外余裕で思考する。明らかかな危機的状况でさえも、この男からペースを奪い取ることはできなかつ

たらしい。

対して岳羽は、かなり焦燥にかられているように見える。

「悪いけど、説明してるヒマはないの。今すぐここから出るから！」

「？ いったいなに？」

いったい何事？と言おうとした瞬間。

それを遮るように、寮を激震が襲う。普段感じる地震のレベルではない。まるで大きな何かがこの寮を直接揺らしているかのような、非常識な揺れの大きさだ。

「とにかく急いでるの！ 一階の裏口から外へ出るよっ！」

そう言うなり、岳羽は駆け出していく。ついてこいという事は言われなくても明らかだ。

有里もそれに続き、不安を覚えながらも駆けだした。記憶が正しければ、裏口まではそう遠くないはずだ。

「よし、ここまで来れば…」

裏口に辿り着き、岳羽はホッして力を抜く。どうやらもう安心していいようだ。

有里もそう思い肩から力を抜こうとした。

直後、小気味良い電子音が廊下に響き渡る。無線の受信音、だろ

うか？自分の考えは正しかったらしく、目の前で岳羽は恐る恐る無線機を取り出した。

『岳羽、聞こえるか!?!』

「ハ、ハイッ！ 聞こえますっ！」

『気をつけろ、敵は一体じゃないみたいだ！ ことは別に本体がいる!』

無線機から漏れる単語に、有里は眉根を寄せる。

…敵とは何だ？

状況から察するに、この察はその敵とやうに襲撃されているらしい事は分かるが……

「マジですか!?!」

有里は思考し、岳羽は驚愕にかられたその時、

ドンッ！

こちらを求めるような暴力的に裏口に通じる扉をたたく音が二人の鼓膜を揺らす。

思わずそちらの扉を振り返る。

ドンッ！ ドンッ！

先ほどよりも明らかにぶち破る気満々の音だ。この分では扉はそう長く持たないだろう。

「うわっ!？ ひ、ひとまず、退却!？」

震えた声でそう言うと、再び岳羽は駆けだす。有里もそれに続くが、そこで気付く。

この寮から外へと通じるのは正面玄関と裏口だけ。正面玄関が使えるのであれば裏口など使わないはず。正面玄関は使えない理由があるのだ。そして今。裏口も使えなくなった。

……この寮に閉じ込められた？

そういう事ではないだろうか。

*

「いたぞ!」

学生寮のとある一室。薄暗い作戦室に真田の声が響く。

あの後、桐条と正面玄関で合流を果たし、何とか正面玄関の方のシャドウは殲滅した。しかし、本体の方はどこにいるんか見当もつかず、作戦室にとりつけてあるモニターから監視カメラをチェックしていた訳だ。

そして、見つけた。

自身に傷を負わせた大型のシャドウが、有里と岳羽の目の前に現れるのを。どうやら屋上に逃げていた二人を狙い、壁を使って這い上ってきたようだ。

実戦経験のない2人が対処できる相手ではない。

隣にいる桐条も同じことを感じたのか、焦燥感を滲みださせ、椅

子から乱暴に立ち上がり二人の元へ向かおうとした。
しかし、

「待てッ！」

幾月はそれを許さないかのように、いつもより低めの声で二人を
制止する。

「ッ何を……！」

二人は思わず振り返る。

そこでモニターに映ったそれを、2人の瞳が映しだした。

有里が、岳羽の召喚機を自身のこめかみに当てているのを。

「まさか……召喚する気なのか!？」

あり得ない。ペルソナという単語しか知らないただの少年からし
てみれば、拳銃を自らの頭に向けるといふ行為はただの自殺行為ぐ
らいにしか認識できないはずだ。

しかし、有里は予想を遥に裏切り、躊躇しながらも引き金を引い
た。

同時に、有里の背後に何かが現れる。それは有里の心であり、も
う一人の有里。

「ペルソナを……?」

真田達は目を見開き、救援に向かう事も忘れモニターに釘づけに
された。

*

「終わった…の？」

有里のペルソナが大型のシャドウを完全に消し去ったのを認識して、岳羽は恐る恐る呟いた。

よくは分からないが、自分が召喚に失敗してシャドウに弾き飛ばされた召喚機を用いて有里がペルソナを召喚した。

ところが、ただの召喚では終わらなかった。

召喚されたペルソナを内側から破るようにして、あつたく別のモノが現れたのだ。ソレは一瞬で大型シャドウを斬殺し、守ってもらったはずの自分にすら恐怖を与えるような存在だった。

恐怖がまだ残っている中、有里の方に目を向ける。

その瞬間。

有里は糸の切れた操り人形のように、地面にドサリと倒れ込んだ。

「有里君ッ!?!」

突然倒れた有里の元に岳羽は駆け寄る。

倒れ方が普通ではなかった。明らかに意識を失っているようだ。

「ちよつ。大丈夫!?!」

肩を強く揺するも、返事はない。岳羽の脳裏を最悪の結果がよぎる。

その時。

オオオオオオ……

「ッ!？」

何かが呻くような声が岳羽の鼓膜を揺する。

恐る恐るその声の発生源へと顔を向けると、先程の大型シャドウが消えたはずの場所から、湧きでるように二体のシャドウが現れる。

見たところ先ほどのような大型ではないが、それでも十分な脅威であることは変わらない。

「い、嫌…来ないで……!」

眼尻にうつすらと涙が浮かぶ。召喚機も忘れるほどの恐怖だ。大型シャドウのこともあり、シャドウに対する恐怖が敏感になっているのだろう。

そんなことにもお構いなしに、二体のシャドウはじりじりと迫ってくる。

「そ、んな……」

これまでなのだろうか。

そんなことが頭をよぎった。

刹那。

「クソ野郎どもがアッ!」

ダンッ!! という扉を蹴り破る音と共に、聴き覚えのある怒声

が岳羽の鼓膜を揺さぶる。

それとほぼ同時に、シャドウに赤い点が映し出され、銃声と共に二体のシャドウは撃ち抜かれていく。

振り返った岳羽の瞳には、怒りに顔を歪めた沢村の姿が映されていた。

死神の片鱗（後書き）

閲覧してくださったみなさん、ありがとうございます！（ ）（ ）（ ）
有里くん、かつこいいですよね。

見舞いと主人公紹介（前書き）

主人公紹介に関しては、物語が進むにつれて追加されるものがあります。

作者の不手際で、主人公の名前が原作キャラと同じものになっていましたので変更させていただきました。苗字はそのままです。本当に申し訳ありませんでした。

見舞いと主人公紹介

病院は苦手だ。

目の前で穏やかな寝息を立てている有里を見て、俺は思わず舌打ちした。

例の大型シャドウとの一戦から一週間ほどたつが、有里が目覚ます気配はない。医者は身体的な外傷はなく、精神的な消耗からくる過労のようなものだと言っていた。

つまり、無理を強いたという訳だ。

自分がもたついている間に、シャドウと遭遇すらした事のない有里と岳羽は立ち向かった。

そして、見事に有里達は勝利したわけだ。真田先輩を負傷させるほどの相手を。

「ちくしょう……」

握った拳から血が滲み出るが、気にせず更に強く握りしめる。

自分がシャドウの群れをもっと早く殲滅していれば有里に無理を強いる必要もなかった。迅速にペルソナを用いて対応していれば、有里と大型の交戦前に駆けつけることも可能だったはずだ。

銃でシャドウを撃ち抜くことに誇りを感じ、その誇りを実感するためにクラスメートを危険にさらす。それが俺の下した決断だった。

「俺があの時」

「ちょっと……、やめてよ」

俺の言葉を遮り、隣にいる座っている岳羽が俯きなら呟いた。

「別に沢村君の所為じゃないよ。むしろ私の」

「俺の所為だろ……ッ！」

岳羽だって実戦経験はまだない。実戦経験もない彼女に死の恐怖を乗り越え、ペルソナを召喚してシャドウを倒せというのは誰が見ても無茶だと分かる。

明らかに俺の失態だ。

それなのに、誰も俺を責めない。岳羽に至ってはむしろ俺を庇ってくれている。

俺の突き放すような言葉に、岳羽は何とか声をかけてくれようとするが何を言っても気休めにしかならないと分かっているのだろう。

病室に気まずさと静寂が訪れる。

「……あの、さ。気休めかもしれないけど、沢村君が来てくれなきゃ私たちはあのシャドウにやられてた。今私たちがこうしてられるのは沢村君のおかげなんだよ」

「……」

「だからさ。そんなに自分を責めないでよ。」

「……ごめん」

俺は何をやっているのだろう。

こんなところでも自分と同じく責任を感じているであろう彼女に気を使われるのが正しいことなのか。そんなはずがない。

感情的になるのはここまでだ。冷静に目の前の現状と向き合わなければ。

ここで吠えた所で有里が目を覚ますなら苦労しない。

「落ち着いた？」

「……ああ。大分楽になった。ありがとな。岳羽さんが居てくれてよかったよ、ホント」

「ちょ、そういう事ストレートに言わないでよ……」

「俺だって恥ずかしいんだ。スルーしてくれて構わねえよ」

俺は横目で少し顔を赤くした岳羽を視界に入れる。

俺が闘う理由は誰かを守るためじゃない。

でも、守りたいと思うヤツはこんな俺にでもいる。

そんな事を思いながら、微笑を浮かべて窓から空を見た。

今日はいい天気だ。

日の光ってこんなに暖かかったんだな。

*

主人公紹介

名前・沢村学さわむらまなひ

年齢：16歳

身長：168cm

体重：58kg

血液型：AB型

性格：

基本的には伊織順平と同じで明るさが目立つ。戦闘中は若干感情的になることもあるが、それが冷静に勝ることはない。

容姿：

茶髪のくせ毛。顔は中々に端正で、陽気さが滲み出ている為話しかけやすい雰囲気を持っている。

しかし、制服のボタンは全開。中の赤いインナーはモロだしという校則気にしないタイプの人間のため、規律を守るタイプの人からは敬遠されがち。

趣味趣向：

好きな食べ物：チョコ

嫌いな食べ物：なすび

使用武器：

銃の扱いに長けるため銃を主軸に用いて戦う事が多い。

ブルパップ式の突撃銃『IMI タボール AR21』と、サイドアームとして『ベレッタ M92』が基本の装備。一応ナイフなども持つてはいるが滅多に使う事はない。

『AR21』はダットサイト、フラッシュライト、レーザーサ

イトを装着。

主人公が『AR21』を好んで使うのは、アサルトライフルでも1、2位を競うレベルの軽さ。ブルパップ式は銃身を切り詰めるカービンモデルとは違いパワーロスや、騒音、発砲炎の増大、集弾性や命中精度の低下などのデメリットがない状態で機動性に優れる等の理由。

ペルソナ：

『ニーズヘッグ』。北欧神話に登場するモノから引用。

スキル：

『メギドラオン』

他は不明

見舞いと主人公紹介（後書き）

閲覧して下さった皆さん、ありがとうございます！
— — — — —

次回もよろしく願いします！！

後日談（前書き）

「今回は最初の満月の後日談みたいなものですので短めです」
「>

後日談

青く彩られた空間。

そうとしか表現できないその空間で、有里は椅子に腰かけていた。

（ここは？ 確か僕は屋上であの怪物と ）

「再び、お目にかかりましたな」

「？」

ぼやけた思考を遮るように、その声は有里の鼓膜を揺らした。

そこでようやく自分の目の前に誰かがいることに気づく。

……確か最初に学生寮を訪れた際に何かわけの分からないことを言っていた男だ。

執事服に身を包み、傍らに銀髪の女性を控えさせた初老の域に達するであろう男。『イゴール』と名乗っていた気がする。

未だ思考を続ける中、そんな事には構わずにイゴールは薄笑いを浮かべながら続ける。

「あなたは力を、『オルフェウス』を覚醒したショックで意識を失われたのです。いやはや、実に興味深い」

「…力」

イゴールの言う力というモノには心当たりがある。

屋上であの怪物に襲われた時、目の前で岳羽が自身に拳銃を向け

ていたのを見て導かれるように自分もそうして引き金を引いた。
そうしたこと、得体の知れない何かが現れた。
おそらくイゴールが言っている力とはその事だろう。

「貴方が覚醒したその力は『ペルソナ』という力。もう一人の貴方自身なのです」

「もう一人の自分？」

「その力をすぐに理解するのは難しいかもしれませんが。ペルソナとは、貴方が貴方の外側と向き合った時、表に出てくる『人格』……。様々な困難に立ち向かっていく『仮面の鎧』と言ってもいいでしょう」

……意味がまったく分からない。

完全に理解する必要はないと暗に言っているのは分かるが、釈然としないというのはこのような事を言うのだろう。

「とは言え、貴方の力はまだ弱い……」

「力が弱い？」

「ペルソナ能力とは心を御する力……。心とは絆によって満ちるものです。絆の力こそが、ペルソナ能力を伸ばしていくのです。よくよく覚えておられますよう」

「絆……」

「さて……。貴方のいらっしゃる現実では多少の時間が流れたようです。これ以上のお引き留めは出来ずまい。今度お目にかかる時

は、貴方自身の意志でここを訪れることでしょうか。では、その時まで」

「ごきげんよう」とイゴールが言ったことを認識したと同時に、眠るように有里は意識を手放した。

*

「マジッ!？」

ポロニアンモールの人ごみの中、俺は携帯を耳にあてながら、思わず大声を出してしまっていた。

当然、周囲の人から奇妙なモノを見るような視線を浴びるが、それよりも今は会話の相手『岳羽ゆかり』の言葉が気になる。

『うん。特に後遺症とかもないみたい。今日中には寮にも戻って来られるって言ってたよ』

「そうか、よかった……」

ふう、と安堵でため息がこぼれでる。

会話の内容はいわずもがな、有里の事である。今日は見舞いの品でも買っただろうかなと思い、ちょっとおしゃれなモノを探していると、岳羽から『有里君、目が覚めたよ』と連絡が入り、今に至る訳だ。

『それと、あの、ち……』

「？」

ここで、岳羽が妙に口ごもるのに俺は首を傾げる。

何故だろう？ 結構明るめのニュースで暗くなる要素などないと思うのだが、言いにくいことでもあるのだろうか？

しばらく沈黙が流れ、やがて岳羽が小さく息を吸って言った。

『……私とあなたの身の上、有里君に話しちゃった』

「……そうか」

父親のことか。

確か有里も親を亡くしているんだっけ。それなら岳羽のしたことでも理解できる。同族意識という奴だ。同じ痛みを知る者として、俺たちだけが有里の過去を知っていることに後ろめたさを感じていたのだろう。

実際、俺自身も感じていたことだ。

『ごめん勝手に……』

「いや、別に構わねえよ。むしろ、俺もそうした方がよかったと思う。俺たちだけ向こうの方を知ってるっつうのはフェアじゃねえ」

『そう……、よかった』

電話越しでも、岳羽がホッと胸をなでおろしているのが分かる。

「じゃあ、また寮でな」

『あ、うん。また後でね』

有里にちゃんと読びないとなと思いつつながら、俺は携帯を懐にしまった。

後日談（後書き）

閲覧してくださった皆様、ありがとうございました！！

遭遇（前書き）

今回もちょっと短めです。

遭遇

有里が退院したその日の影時間、タルタロス内部。

俺は目の前のAR21の引き金を引き、シャドウにいくつもの穴が開くのを確認して、ドットサイトから目を離す。

……今夜の俺はいままでで一番キレてる（動きが）と思う。

ちなみに今日俺が単独でタルタロス探索しているのは、いつものような私的理由からではない。先日大型シャドウによる襲撃というイレギュラーが起こったからだ。

もしかしたら何かタルタロス内部にも異変が起きているかもしれないと思い、特別課外活動部において唯一単独でのタルタロス探索が許可されている俺は桐条先輩に申告して探索をやらせてもらっているわけだ。

しかし、あれから何度か探索に来てみるも特に変わったことは無かった。

もう見飽きたシャドウに穴を開けるだけの日々が続く。

「……ただの偶然だったのか？」

露ほども思っていないことを口にする俺の前に再びシャドウが現れる。数はたったの二体だけ。

思わずため息を吐く俺に、シャドウが吠えた。

いつもならすぐに弾丸をプレゼントしているところだが、

「久しぶりに近接と試してみるか」

AR21から手を離し、体にガツチリと固定する。これで多少激しく動いても落とす事はないだろう。

「っしー！」

固定を終えると同時に、力の限りに地を蹴った。

さながら閃光のようなスピードで迫る俺にシャドウが炎の塊を飛ばしてくるが、驚異的と言える俊敏さで易々とかわしつつ距離を詰める。

「悪いな。焼かれる趣味はない」

二体のシャドウの間に割り込むような形で距離を完全に詰めた瞬間。

右手で腰からナイフを引き抜き、そのまま逆手に持ちかえて一体目を斬りつけ、その勢いを利用して一回転しながらもう一体も斬りつける。

刃渡りの大きめなナイフだが、一撃では致命傷にはならないだろう。

何度も回転を繰り返し、斬りつけ、刺し、また斬りつける。反撃などさせてやるつもりはない。

やがて、一体のシャドウが黒い粒子となり空気に溶けるように消える。

ソレと同時に俺は回転を止め、もう一体のシャドウにナイフを深々と突き刺した。

「ナイフも結構いけるな」

深々と突き刺さったナイフを引き抜くと同時に、そのシャドウも崩れ落ちる。

それを見て、俺は口角をつりあげた。

自分はいくまで間合いを開けながら戦闘を行うタイプ。それは否定しない。

だからといって、近接格闘の術があつていけないわけじゃない。引き出しは多ければ多い方がいいに決まっている。特に、戦力が拮抗している時は、引きだしの多さが勝利に結びつくことが多い。

「……収穫はあるっちゃ、あつた。今日はもう帰還するか？」

現在、自分がいるのは4階だ。俺はいつもこのフロアより上には上がらないようにしている。

俺としては更に上を目指したいのだが、単独でのタルタロス探索の際には『番人』と呼ばれるシャドウには挑むのはあまり得策ではない。

もちろん自分の力なら殺れるとは思っている。しかし、念には念をとというやつだ。

もし番人との戦闘で、勝利しても多少負傷したとしよう。その時点で、俺のソロタルツアー（単独でのタルタロス探索）が開幕されなくなるのは明らか。それは面白くない。

しょうがないなと、俺は帰還すべく踵を返した。

その時、一体のシャドウが視界に入る。

「折角だ。お前もいい所に連れて行ってやるよ。」

ナイフを手に、俺はシャドウに向かって再び駆けだす。

対して、シャドウはそれに気づいたらしく即座に逃げだした。たまにある事だが、シャドウも人間の力に恐怖することがある。

面倒くさいとは思いつつも、俺は地を蹴りつけるのを止めない。

……追い付ける！

そう確信した時だった。

いままで一本道という空間だったが、右に曲がり角が見えた。当然、シャドウはその曲がり角におれる。

これも当然ながら、俺もそれにならって曲がり角を折れた。

それが、『きっかけ』だった。

「……ハ？」

曲がり角をおれた俺の視界に、『ソレ』が入る。

先ほどまで追っていたシャドウが、黒い塵となり消えるのが。

それだけでも驚愕に値するが、俺が顔をひきつらせた原因はそこではない。

「お前は……何だ……!?」

正面に『ソレ』がいた。

全身を艶のある装甲で覆った人のような姿の『ソレ』。顔はヘルメットのようなものに覆われ、中央に紅く光る点がある。

そして、右手に黒い刀。全く光を放たない、輝かない黒い刀身だ。俺の問いに『ソレ』は答えない。

代わりに、『ソレ』はまるで瞳のように輝く紅い点を俺に向け、刀で軽く空気を斬り裂く。

「ッ！」

瞬間、俺は理解した。いや、初めから分かり切っていたことだろう。

コイツは、敵だ。

遭遇（後書き）

閲覧して下さった皆様、ありがとうございました。> | | <
次回は戦闘回です！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4437z/>

ペルソナ3 《とある少年と絆と奇跡》

2011年12月23日23時48分発行